アラーキーな四半世紀

富田　雄一郎（中央学院大学専任講師）

それは大学一年生の時に受けたほとんど最初の授業だったように思う。イギリス文学だったか一般文学だったかは覚えていない。しかし印象は強烈であった。『ロビンソン・クルーソー』を分析する講義で、その教員はおもむろにデフォー（Defoe）の名をDe-とfoeに切り分け、「分離／否定（de-）」と「反対者（foe）」の戯れがテクスト内に蠢いていることを細部に亘ってこと細かに解説しだしたのである。文学理論など何も知らない一年生にとっては大いなる戸惑い以外の何物でもなかったが、しかし一方で、鮮やかな手品を見ているかのような、フツーと違う何かに触れているような不思議な快感をも感じていた。それが"アラーキー"との出会いだった。ことあるごとにその記憶が、板書するチョークの音と匂いをさえ伴って蘇ってくることを考えると、衝撃は自分が意識している以上に大きなものだったのだろう。私のバルト的な記号と構造への興味はここをルーツとする。

看護学校の「文学」の講座を紹介して頂いたことも私には大きな意味があった。専門外の学生を、100分間、休みなく、退屈させずに惹きつけるにはどうすればよいか。毎回が試練のような講義だったが、そこから得たものは極めて大きかった。古典文学ではなく彼らが親しんでいるヒット曲やコミックから題材を選んだり、飽きない話の構成・テンポ・言葉遣いについて四苦八苦しながら考えた工夫が、現在担当している「オペラ講座」や「テクストとコミュニケーション論」などの授業に生きていると思う。

こうして感謝と思い出の記憶を辿りながら、気づいた。英文の読み方を教えてくれたのも荒木先生だったのだ。前から順番に意味を掬いあげていく、名詞を一旦動詞状態に還元して訳すなど、今自分が学生に教えていることも先生から受け継いだものだ。

スタイル・テクニック・英語力、それこそ何から何まで〈荒木正純〉の影響を受けていたのだなあと思うと、なにやら嬉しい。考えてみたら最初の講義に触れた時からちょうど四半世紀が過ぎている。これ程長い間近くにいれば影響も受けるわけだ。しかしまだまだ発見は尽きていないはず。これからもう四半世紀も刺激と影響を与え続けて欲しいと願う。それによって少しでも成長し、次の世代にその遺産を伝えていくことが、教え子としての恩師への感謝の仕方であるはずだ。

荒木先生には心より感謝申し上げます。そしてこれらからもご指導をお願い致します。